



大西脳神経外科病院だより 第39号

ぶれいん

発行日：令和元年12月吉日

発行：学術図書委員会

発行責任者：大西 英之

編集責任者：吉野 孝広

大西脳神経外科病院の理念

生命を尊厳し、科学の心と芸術的技術と人間愛をもって病める人々に奉仕する。

大西脳神経外科病院の基本方針

生命と人権を尊重した医療を実践する。

神経疾患の専門的・高度医療を実践する。

常に新しい医学の修得に励む。

救急医療は医療の原点と考え、24時間対応する。

地域の医療機関との連携を密にし、地域協力型の医療を志向する

世界の流れを見ながら医療を考える

大西脳神経外科病院

理事長 大西 英之

年の瀬も迫り、慌ただしい最近ですが、今年1年を振り返り来年に向け目標を考える時期ではないでしょうか。

さて世界に目を向けてみるとシリアやイラク、アフガニスタンではいまだに紛争が続いており、自分の生まれ故郷に住むことが出来ず、ヨーロッパに難民として流れているという現状があります。そしてその難民を人道的立場から受け入れてきたのがEU、特にドイツなどです。しかし今、何千万と言う難民が押し寄せてくる状況が長く続き社会問題となっています。国民の中にはそれをよく思わず閉鎖的になり自国民を第一に考えようとする動きが強まっています。



トランプ大統領が自国ファーストを打ち出してその傾向に拍車がかかっている現状です。「全体ではなく自分たちが良ければそれでよい」という考え方が広がった背景はどこにあるのでしょうか。

少し視点を変えてみましょう。ICT (information communication technology) が発達しいろいろなことが便利になりました。移動しながら多くの情報を得る事ができ、さらに情報発信ができる、直接行かなくても買い物ができるお金はネット上で動かすことができます。いまこのICTを制したものが「勝ち組」と言われています。GAFA (グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン) がその代表です。莫大な利益を得てはいますが国家単位での所属でないため納税はしておらず非常に不公平な

状態にあります。世界全体が早急に課税方法を決めて対応していかなければ技術進歩に伴って起きる弊害は大きくなる一方です。「自分たちだけが利益を上げられればそれで良い」と言わんばかりです。しかしICT無くして今の社会が成り立たないのも事実です。

医療に関して言えば生死の問題は永遠に続くことで病院機能がこれらICTに取って代わるという事がすぐに起こることはないと思いますが、我々も形態の変化に敏感になる必要はあると思います。具体的な方策は試行錯誤しなくてはなりませんが、変化する時期はもう目の前にある事を意識しておかなければなりません。

私は4月から院長職を辞し、当院は新たに久我純弘先生を院長として始動しました。院長主導のもと世の中の動きを見ながら臨機応変に対応していく必要があります。試行錯誤しながら来年の目

標、そして5年後、10年後の先を見据えていなくてはならないと思います。急な方向転換を必要とする場合もあるかと思えます。個人も組織もそして医療も変化して、新しい時代と共に発展していくようになれば良いのではないかと感じています。

ただし忘れてはならない事は「自分だけが良ければ」という事ではなく「全体のためにどう変化するか」という事ではないかと思えます。



大西 英之 理事長

2019年 日本脳神経外科学会

第14回 齋藤眞賞地域功労賞受賞

「齋藤眞賞」は1948年、現在の日本脳・神経外科学会の前身である日本脳・神経外科研究会の発足に尽力し、1949年の第3回総会まで同研究会の会長を務められた（故）齋藤 眞博士が脳神経外科学の発展にささげた情熱を後世の脳神経外科医に伝承していく手段として日本脳神経外科学会が平成18年に発足させた賞です。



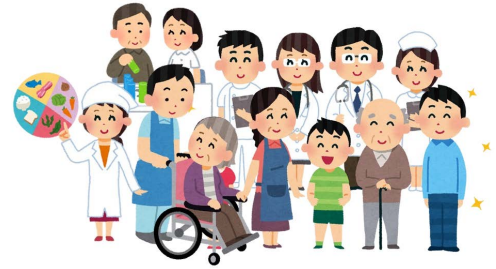
非常に権威のある賞で国際賞、社会賞、学術賞、地域功労賞の4部門からなります。そのうち大西英之理事長は本邦の脳神経外科学の啓発に務め、地域功労への貢献が顕著であった事が認められ今回の受賞となりました。

この受賞を大西理事長は「私が認められたのではなく大西脳神経外科病院と言う組織とそこに関わっているすべての方々が認められたという事だと思えます。皆様の病院への貢献、地域への貢献により頂けた賞だと思えます。」と述べられています。

病院機能評価 3rdG;Ver.2.0 受審



2004年の受審から今年で4回目となる病院機能評価でした。病院の現状を見直す良い機会となりましたが、皆さんはいかがでしたか？受審にあたり準備をされた職員の方々に感想を聞いてみました。



病院機能評価の更新を受信して

院長 久我 純弘

令和元年11月14日、15日と日本病院機能評価機構（機能評価）の認定更新のための受審を受けた。当院が開設されたのは2000年12月であるが、2004年に初回機能評価認定を得た。その後、5年ごとに更新のための受審を行い、今回が受審は4回目となる。今回は3rdG,Ver2.0で、一般病院1、審査体制区分2での受審となったが、2017年から回復期病棟を新設したため更に副機能として回復期リハビリテーション病棟が加わった。

病院機能評価認定の利点としては、認定病院として公示できる点、診療報酬上の加算項目などもあるが、主な目的は医療の質の向上と安全の確保である。最近では機能評価機構も医療環境の変化に対応して、「患者が安心して医療を享受でき、職員が働きやすく、地域に信頼される病院づくり」を主な評価の柱にしてきている。なるほどと納得できる趣旨である。この点を踏まえたうえでの今回の受審である。評価項目は患者中心の医療の推進、良質な医療の実践が中心となっており、



その中でたくさんの項目に細分化されている。4回目の受審であり、認定合格が目標ではなく（認定は当然）、当院の現状の確認と改善すべき点を洗い出すには非常に有用なツールであった。事務局の中田さんを中心に各項目の担当を多くの職員に分担してもらうことで、多くの職員がそれぞれの立場で現状を把握でき、今後の改善点を考える機会になったと思う。項目数が非常に多いことから分かるように医療は決して医師が一人で行えるものではなく、たくさんの部門の個々の職員が任された仕事、課題を適切に解決し、その結果としてチームとして安全で良質な医療を提供することができることを改めて実感した次第である。

受審直後の講評は概ね良好であったが、いくつかの改善すべき点も指摘された。一人の患者さんの治療にチームとして各部門がかかわること、特にその中で医師がリーダーとして関わり、それを記録に残すことを強く求められた印象がある。今後、当院の機能評価委員会での改善点の確認と最終結果報告を待ち、更に安全な高度医療の実践ができる組織体制ができれば本望である。



「病院機能評価事務局メンバーとしての思い」

ITシステム室 副室長 機能評価委員会事務局

中田 隆司

「病院機能評価は、我が国の病院を対象に、組織全体の運営管理および提供される医療について、当機構が中立的、科学的・専門的な見地から評価を行うツールです。当機構は、病院機能評価を通じて、病院の質改善活動を支援しています。」と、公益財団法人日本医療機能評価機構のホームページにあります。簡単に言いますと、第三者機関が病院の隅々まで審査して、良いところ・悪いところを洗い出し、改善に向けて支援していく、といったところでしょうか。



その審査の流れですが、書類による事前審査を行った後、サーベイヤー（評価調査者）が複数名来院して医療現場を訪問、そして担当者に聞き取りを実施します。患者・家族への関わり方、各種判断に至った経緯や状況の確認、医療機器の管理や医療廃棄物の処理方法、職員の労務管理、病院の財務管理と、まさしく隅から隅まで確認しました。もちろん、その訪問審査の間も通常診療を行っていますので、影響がないよう配慮しながら、審査の対応にあたりました。訪問審査は2日間ですが、とても長い2日間でありました。

受審して認定証交付を受けるまでには、費用的負担と作業的負担は大きいものです。その負担をしてでも受審するには大きな意味があります。第三者機関による客観的評価を受けて、良いところ・悪いところを洗い出し、良いところは更なる向上を目指し、悪いところは改善の努力を行います。

これを積み重ねることにより時代にマッチした最先端かつ最善の医療の実践と、患者・家族に寄り添うやさしい医療の提供を通して、地域社会への貢献を目指したいと考えます。

病院機能評価は5年の認定期間が定められています。当院では過去3回、今回で4回目の受審になり、認定が途切れたことはありません。今後も継続的に受審し更に高いレベルの認定に、更に高いレベルの病院になるよう努力を重ねています。



病院機能評価から見るチーム医療

リハビリテーション科 副技師長 宮本 直也

当院が機能評価を受ける目的は、評価を受けることで、最善の医療を提供できるように現状を見直し改善していくことだと思います。評価を受ける為に様々なマニュアルや業務手順の見直しや修正が各部署で行われたと思います。

私は回復期病棟症例トレース及びリハビリテーション科への部署訪問に上長と共に対応致しました。



指摘事項としては、全体的に建設的な内容が多く、より安全な医療を提供するためのリスク管理に関する事や多職種連携に関する内容が大部分を占めていたと思います。回復期病棟に関する事では多職種連携及びチーム医療が適切に行われているかを重要視されていたと思います。当院の回復期病棟では担当療養士・看護師・MSWが主となって入棟患者の社会復帰に向けてカンファレンスや診療業務を実施していますが、今後は医師・薬剤師・栄養士も一同に会して患者の方向性を検討していく体制を構築していく必要性があります。

各部署多忙な現状は十分認識していますが、多忙な事を理由にしていると何も改善策は見えてこないと思います。何事もそうですが、如何にすれば指摘事項に対して体制や業務内容を改善していけるかを各部署が知恵を出し合って検討していく必要があると思います。



病院機能評価から見てきたもの

脊椎・脊髄センター（北2階病棟）看護師長 吉原 朋子



病院機能評価は『普段、行っている医療を評価してもらうもの』とはいえ、いざ受審となると、不安なことや改善すべき点が多くみつきり、マニュアルの確認、書類の整理、記録のチェックなど直前まで準備に追われる毎日でした。病院指定病棟として対応することが決まりましたが、私自身の問題として4月に異動をしてきたばかりで、まだわからないことが多く、手探りの中での準備開始となりました。大変な中、受審を前向きにとらえ取り組んでくれたスタッフに感謝しています。

当病棟は脊椎・脊髄センターであり、他の脳外科疾患との違いは、疾患により後遺症を抱えることが多い中、ADLが入院前と比べ手術後大きく改善されることです。患者さまの改善を一緒に分かち合えることが最大の特徴ではないかと思っています。今回、症例トレースの患者さまも、入院時は寝たきりの状態でしたが、手術・リハビリを経てチームで介入し車椅子移乗まで行うことができました。今回機能評価にむけての取り組みとして事例を振り返る中で、普段やっていることが患者さまの回復の手助けになっていると実感できました。

しかし受審を終えて明らかになった課題があったのも事実です。



普段行っていることが、本当に患者さまにとって良いことなのか、もっと違う介入ができたのではないか、システムの変更が必要ではなかったのかと立ち止まる機会にもなりました。

改善すべきことはしっかりと受けとめ改善し、出来ていることはさらに良い医療が提供できるよう、日々成長していけるチームでありたいと思います。

過去の病院機能評価受審を振り返り

回復期リハビリテーション病棟（北3階）

看護師長 米田 芳子



5年に一度がとても短く感じる病院機能評価ですが、今回で4回目の受審となりました。10年前を思い出してみると、2009年の2度目の受審で、師長や主任を中心にマニュアルや看護計画などの見直しに連日夜遅くまで残っていました。足りない書類やマニュアルも多くあり、作成、追加、修正を来る日も来る日も行っていました。受信の2年前に電子カルテに移行して整備の必要なことも多く、まさに猫の手も借りたいと感じていた事が思い出されます。

2014年の3度目は、南館増設の翌年であり、新しい施設のお披露目でもありました。施設に関して南館は、十分な物品の置き場所や感染予防対応、快適な空間は全く問題ありませんでした。3回目ということで規定の基盤はあり、マニュアル類は修正にとどまりました。

1回目の自分達だけがしているスタイルから、スタッフへの周知や現場を中心に準備していた印象でした。また、この時は「医療の質」を多く問われました。日々の業務をフィードバックする良い機会となりました。

4回目の今回、看護部一般病棟（急性期）はさすがに余裕さえも感じられました。私は、回復期リハビリテーション病棟（以下、回りハ病棟）として副機能の受審を担当しました。回りハ病棟は、開設2年ということで、問題の明確化とそれに対する対策と周知ができる絶好の機会でした。

病院機能評価を受審し始めた15年前は、自部署の事だけでもよかったような気がします。しかし今は、「チーム医療」「多職種連携」は当たり前で、=同じ目標を持っている。しかし、考察や実践は全く違うこともよくあります。患者を取り巻く集合体の横のつながりの難しさは、自部署の縦のつながり以上になかなか手ごわい気がします。集合体としての難しさがあるからこそ無限大の力を感じるのかもしれない。

回りハ病棟は、患者の生活の再構築を援助するために自分達も患者に合わせ再構築できる病棟であるように2020年度も力を合わせて頑張っていきたいと思っています。

患者の生活の再構築を援助するために自分達も患者に合わせ再構築できる病棟であるように2020年度も力を合わせて頑張っていきたいと思っています。



毎週水曜日の入棟会議



症例トレース 回復期リハビリテーション病棟



日清医療食品株式会社の小宅と申します

チーフ調理師 小宅 力



いつもお世話になっております。日清医療食品株式会社の大西脳神経外科病院様の厨房で勤務をさせて頂いている小宅と申します。弊社は1972年に設立された会社で、本年で48周年を迎えております。本社を東京に構え、16支店、16営業所の下、全国で約5500ヶ所の病院や福祉施設で、給食受託業務を行わせて頂いております。「お客様の信頼と満足を得る 心のこもった食事サービスを提供する」これが日清医療食品のテーマです。



食事を召し上げる方には、安全・安心な食材の仕入はもちろん治療・療養が必要な方など、一人ひとりの状況を踏まえたバランスの取れた栄養摂取の設計、それに基づく献立作り、調理技術などが求められています。日清医療食品では、「おいしく食べて元気に！」をモットーに、医療・福祉施設に特化した給食業務を受託させて頂いております。

大西脳神経外科病院様においては、20代～70代までの幅広いスタッフで日々食事提供をさせて頂いております。安心・安全な食事サービスが提供出来るように日々努力しているところでございます。何かと至らない点もあろうかと思いますが、今後とも何卒宜しくお願い致します。

院内旅行記

初めての小豆島

放射線検査科 放射線技師

磯谷 直紀



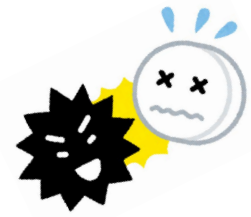
今年入職させて頂き、初めての職員旅行へ参加させて頂きました。秋の小豆島満喫の旅ということで私自身初めての小豆島でした。天候も良くて暑くもなく寒すぎずでフェリーでの移動も気持ちよかったです。小豆島国際ホテルで昼食を頂きましたがとにかく豪華でした。鮑の踊り焼きやオリーブ牛、渡り蟹に加え名産のオリーブや醤油なども贅沢に使われた会席料理で食欲の秋を満喫できました。スモモのワインは飲みやすくイチオシです！！寒霞渓では紅葉には少し時期が早くまだ緑も多かったですがロープウェイでの景色は圧巻でした。小豆島は小さいながらも今回観光した場所以外にもたくさんの名所があるようで機会があ

ればぜひまた来てみたいなと思いました。バイクでのツーリングに来ている人もたくさんいて私もいつかバイクで行きたいです。普段一緒に働いている皆さんと楽しむことができリフレッシュができてとても楽しかったです。これを活かに日々の業務もがんばっていきます。



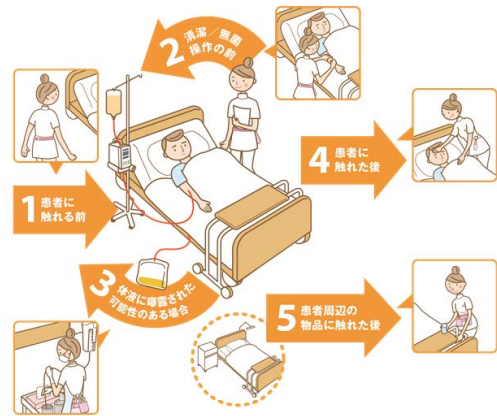
薬剤耐性菌について

感染防止委員会 荒田 大輔



1980年代以降、抗菌薬の不適切な使用を背景として、新たな薬剤耐性菌が増加し、公衆衛生および社会経済に重大な影響を与えています。2016年より当院でも院内感染対策サーベイランス(JANIS: ジャニス)に参加し、調査、監視を行っております。耐性菌の検出は増加傾向ですが、市中薬剤耐性菌の持ち込みも多くなってきております。

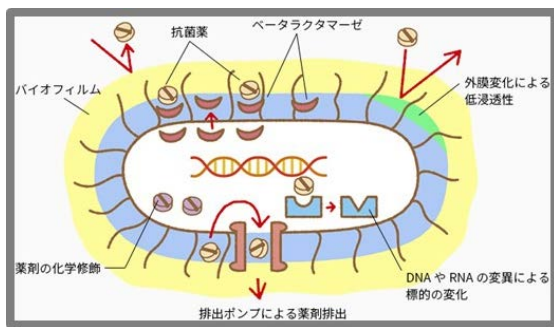
細菌は様々な方法を駆使して抗菌薬曝露から生き延びようと試みます。例えば、自身を覆っている膜を変化させて薬の流入を防ぐ(外膜変化)、細菌内に入ってきた毒を外に汲み出してしまう(排出ポンプ)、抗菌薬の作用点を変化させる(DNAやRNAの変異)、化学反応で分解してしまう(ベータラクタマーゼ)、バイオフィームを形成するなどの方法があります。適切な抗菌薬の使用と薬剤耐性菌の水平感染を防止しなければなりません。薬剤耐性菌はヒトからヒトへと伝搬します。医療者を介して広がっていく可能性があるため、薬剤耐性菌による感染症を発症している、または保菌が判明している患者に対しては、慎重な標準予防策、接触予防策が必



WHO: My 5 Moments for Hand Hygiene 5時刻
URL: <http://www.who.int/gpsc/5plus/background/5moments/en/index.html>
© World Health Organization 2008. All rights reserved.
Illustrated by SARAYA CO., LTD.

要です。特に手指衛生は伝搬防止の鍵です。で、WHOの提唱する5つのタイミングに準拠した正しい手指衛生を行う必要があります。

また、薬剤耐性菌はヒトから環境へも広がります。薬剤耐性菌をもつ患者が入院した部屋には多くの耐性菌が定着していることが知られていますし、抗菌薬を使用した患者のベッドを利用する次の患者はクロストリジウム・ディフィシル感染を起こしやすいことがわかっており、これは環境にクロストリジウム・ディフィシルが残存しているためであることも報告されています。ここでも標準予防策、接触予防策が重要なことはもちろんですが、患者周辺環境は汚染されているもの、という意識をもって行動することが大切です。



編集後記



今年は暑い夏から一転、秋を飛ばして冬になった感じで、こう言ったことも何となく異常気象の表れなのかと、つい環境問題に置き換えてしまいます。

特に台風はこれまではないような経路を通過して日本各地に甚大な被害をもたらしました。本当に災害の多かった年です。もちろんいいこともありました。ラグビーワールドカップでは日本代表が活躍し多く

の人に感動を与え今年の流行語大賞も「one team」になったほどです。さて皆さんの一年はいかがでしたか。悲喜こもごもあるかとは思いますが、個人的には「ぶれいん」の年末号が無事年内に皆様のお手元に届いたことにほっと胸を撫でおろしています。来年もぶれいんをよろしく願います。(吉野)

